

挑戦から逃げたあの日——屈辱が教えてくれたこと

何かに挑戦する時は、いわゆる「滑り止め」をしない私が、一度だけ滑り止めをしたことがあります。大学受験です。

その話に入る前に、大学受験の前段階である高校生活について少し触れさせていただければと思います。

3年間を過ごした都立国立くにたち高校を受験した際も、私は滑り止め受験をせず一発勝負で入学しました。ただこの時は自分の意志というより、親の方針に従ったまでのことでした。私の両親は少々（かなり？）変わってしまって、いくら担任の先生から「都立の試験当日に病気になったりと、もしものことを考えれば、やはり私立をどこか一校は受けておかない」と熱心に勧められても、「受験させるのは都立だけで十分です。それ以外を受ける

には及びません」の一点張り。そして滑り止めの私立高校を受験しない代わり、その受験料と入学金分だと思つて行つておいでと、事もあろうに中学3年生の夏休みを丸々使つて、ロサンゼルスにホームステイ留学をさせてくれたのです。

もし合格しなかつたらどうするかという私の問いに母は、「もし受験に失敗したら、どこがお金持ちの家のお手伝いさんになるように」と言つていました。「おまえに才覚さえあれば、きつとそこのお屋敷で才能が認められ人生が開けるから」と少女小説のような夢物語を母は真顔で語つていましたが、一体私の両親は考えることが大きかつたのか、それとも単におおぎつぱなだけだつたのか、その答えはいまだに出ておりません。

運良く入学できた国立高校は、学力は都立でトップクラス、しかも部活動にもきわめて熱心な高校として知られていました。都立高校としてはじめて硬式野球部が甲子園に出場をした高校として、ご記憶の方もいらつしやるかもしれません。

校風はいたつて開放的。服装は私服でしたし、髪型も化粧も何ひとつ学校側からの規制はありませんでした。先生から勉強しなさいと言われた記憶も無ければ、居眠りするなど注意されたこともない(昼食直後の5時限目はひたすら舟を漕いでいたと記憶しています)。

実に自律的で自由な高校でした。

それならばキャンパスライフはさぞかし楽しかったかと言えば、これがどうも高校時代を色でたとえると、ひたすらグレー一色。誰でも青春真っ只中で一番思い悩む年頃ではあるのでしようが、とにかく暗かった。目覚めた自我と社会との距離感がうまく測れず、周囲との折り合いをどうつけたらよいか始終とまどっていた気がします。

例えば暗黙の了解として、女子生徒はトイレに独りで行かず、お弁当も一人では食べないものとなっていました。私にはそれがまったく理解できませんでした。クラスには自然と仲良しグループが出来ていて、昼休みにお弁当を食べるのも一緒なら、休み時間にトイレに行くのも一緒。時には友達とトイレに行くのも、食事をするのも結構ですが、年から年中、どうして他人と一緒に行動しなければならないのでしょうか。トイレなんて自分が行きたい時に行けばいいし、食事だつて本を読みながら一人で食べたい時だつてある。そう思つて自分なりに行動しているうちに、次第にクラスから浮いてしまった時期もありました。

授業中にも、理解に苦しむことが多々ありました。先生から「では、意見のある人は手

を上げて」と答えを求められたので挙手をして発言をすると、クラスのどこからか「シュー」という声が聞こえ、やがてそれは何人もの声が重なりどんどんトーンを上げてゆきます。「自分だけいいカッコをするんじゃない」という、声にならない声。結局、村八分にあうのが嫌で、誰も授業中に発言をしなくなりました。

こうしたことが災いして、どこか釈然としない思いで過ごした高校3年間でしたが、いよいよ大学受験を迎えても、はつきりとした将来の夢が描けているわけでも、是が非でも学びたい何かがあるわけでもありません。漠然と、文化芸術関連の何かが学べたらという気持ちから、美学美術史が専攻できる大学に的を絞って行きました。

となると、とりあえず東京近辺では、東大か早稲田・慶応。本当は大学でしたら京都大学で学んでみたかったのですが、それも旅行で京都を訪れた際の印象や、リベラルな校風が肌に合いそうというなんとなくのイメージで、さほど根拠のあるものではありませんでした。ですから、「京大に行ったら、おまえの性格だと地下に潜ってしまう（＝学生運動に参加してしまう）から賛成しかねる」という父の一言で、あっさり諦めてしまいました。

でも、東大も早大・慶大も、どうしても行きたいという大学ではないのです。今にして思えば、どうしてもつと真剣に、自分は何を学びたいのか、何のためにわざわざ大学まで行くのか、突き詰めて考えるべきだったと深く反省しています。ただ当時はお定まりの受験戦争コースに乗せられて、少しでも偏差値の高い大学に行けば、それですべて事足りるように思っていたフシがあります。

とりあえず模擬試験などの結果から、なんとか合格できそうかなという東京大学を第一志望にしました。第二志望は慶応大学にしたかったのですが、結婚当初から父が、「娘が生まれたら必ず受験させる」と夢に描いてきた東京女子大学（どうやら父の時代の東大生は、東京女子大に対して特別な思い入れがあるようです）の受験日と重なっていたので、これも諦めて早稲田大学を受けました。

自分でもなんでこんなに自分の人生の決断を人任せにしてしまったんだろうと思います。要するに受験戦争に押し流されて、自分を失っていたんだと思います。

こんな調子で受験に挑んで、良い結果が得られるわけありません。現在の大学センター試験にあたる共通一次試験で思ったように点数が伸びなかったため、安全圏を狙って第

一志望を東大からお茶の水女子大に変えてしまいました。その挙句に、お茶大での第2次試験で出題された国語の問題がどうもしつくり来なくて答案用紙を埋める気力を無くし、事実上試験をリタイヤしてしまつたのです。1年浪人するという選択も無いわけではありませんでした。ここまでしてもう一度東大に挑戦したいという意欲も起きず、結局、第2志望で合格した早稲田大学に入学してしまいました。

早稲田大学自体になにか大きな不満があつたわけではないのですが、早稲田への入学は自分が人生の勝負から逃げたこととイコールでしたので、それから大学名を聞かれるたびに随分と胸が痛みました。ただあの時、これ以上惨めで情けない思いはないという経験をしたからこそ、「もう二度とあんな思いはしたくない。金輪際、勝負からは決して逃げない」と思い定めることができたのだと思います。

もしあれですんなりと東大に合格してしまつたら、きっと私はその後NHKに入局することも、国会議員になることもなかったと思います。挑戦して失敗する痛みより、挑戦から逃げて思い通りにならなかつた屈辱の方がよほどつらいことを、身をもって教えてくれた大学受験は貴重な人生の一ページです。